

# 青年期の学びで大切にしたいこと ―七転び八起きの自分づくりとつとめ

鳥取短期大学

國本真吾



## 自分づくりにかかわる青年期の発達課題

「青年期」の時期設定には、諸説あります。おおむね、思春期にみられる二次性徴の頃を始期としながらも、その終期については明確ではありません。ここでは、後期中等教育段階（高等学校、特別支援学校高等部）やその前後を軸にして「青年期」を扱います。

青年期は、身体的・心理的・社会的に、子どもの時代から大人の時代へと移行する過渡期です。「子どもから大人へ」と移行するこの時期は、「第二の誕生」などとも表現され、アイデンティティ（自我同一性）の確立が発達課題だとされます。アイデンティティの確立とは、「自分は何者か？」などの問いを通して、自分自身を形成していくことです。渡部昭男さんは、「子どもから大人への移行は直線的な発展ではなく、揺れ動きつつ、それまでの様式を否定して新しい様式

進学することで、自身の人生設計における思考の時間、つまりアイデンティティの確立に要する時間が生み出されています。この期間を「モラトリアム」（猶予期間）と表現されることがあります。進学により仕事に就くまでの猶予期間が確保・延長されています。しかし、障害青年の多くはこの自分づくりに必要な時間が、障害のない青年と比べても十分確保されていません。

「高等部卒業後も学び続けたい」「社会に出る自信をつけてから学校を卒業したい」など、後期中等教育を終える18歳以降も継続した学びの機会を求める声は高まっています。その声は教育年限延長の要求として、特別支援学校に高等部専攻科の設置を求める専攻科づくり運動の形で展開されています。しかし、依然として専攻科を設置する学校の数は限られ



校長室に貼り出されたメッセージ  
(2017年、神戸大学附属特別支援学校)

を再構築する過程」とこの時期を表現し、「青年自身による子どもから大人への自分づくりを、教育的に組織し、方向づけ、援助する」ための青年期教育の重要性を説いています（渡部2009）。

また、青年期は「子どもから大人へ」の移行とともに、「学校から社会へ」と移行する時期にもなります。しかし、特別支援学校では「キャリア教育」の名のもとで技能検定に代表される教育が横行し、職業自立を強調する動きがこの間絶えません。青年期の自分づくりにおいては、「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行を支援する営みが求められます。

## 18歳以降も「もっと学びたい」という声

障害のない青年の多くは、高校卒業後に大学や専門学校に進学しています。他方、障害福祉サービスを活用した「福祉型専攻科・大学」のとりくみは拡大しています。昨年3月、文部科学省の有識者会議は「障害者の生涯学習の推進方策について」と題する報告をとりまとめました。ここでは、このような情勢を受けて、学校から社会への移行期の学び、各ライフステージにおいて求められる学びを実現する場づくりが必要であると述べるに至りました。

## 金平糖のような内面を見せる青年たち

18歳以降の学びの場で、他人への言動が厳しく、時に破壊的な言葉を投げつけたりして、周囲を挑発する青年の姿を見ることがあります。また、何を行うにも自信がなく、失敗を恐れ、常に大人の顔色や反応をうかがいながら行動する仲間の姿にも触れることがありました。

このような青年たちの姿を、私は「金平糖」に例えています。金平糖は、表面に凸凹の突起があるお菓子です。熱しながら回転する鍋に核となるザラメを入れ、煮詰めた飴を少量ずつかけながら、時間をかけてゆっくり凸凹の突起を成長させながら作られています。先ほど挙げた青年たちの姿は、それまでの彼らの育ちにおいて、この金平糖の製法と重なるような経験を有しているように映ります。

学校現場でのゼロ・トレランスの横行、「学校スタンダード」と称される規律、障害特性を踏まえて構造化された環境や方法などが、子どもを追い込んでいるといわれます。そのなかで、子どもは一方的に用意されたルールや枠組みを与え